

<書 評>

稀津一芳著『英語通信文の歴史』(同文館出版 平成13年3月)

中 野 宏 一

1. 本書の構成

電子メールやインターネットが活用され、瞬時に情報が伝わるグローバル化社会の時代に、「英語通信文の歴史」という書物の発行は時代錯誤ではないか、と思われる読者がおられるかもしれない。しかし、副題「英国の英文レターマニュアルに見る商用通信文(ビジネスレター)の移り変わり」から予想できるように、本書は、英語通信文、特にビジネスレターの発展過程を明らかにしたもので、これまで、日本人研究者の誰もが注目しなかったユニークな視点から取り上げられた内容で、類似書もない。

今日外国の業者にレターを書く時、我々は所定の書式に従う。多くのビジネスマンが疑問を抱くことなしに、あるいは疑問が湧いても忙しくて考える余裕もなく、“Dear Sir”あるいは“Dear Sir/Madam”で書き始め、“Sincerely”もしくは“Very truly yours”で終える。この単純な書式に、著者は疑問を抱き、現代のビジネスレターの書き方、形式のルーツを探るべく、過去に遡り、その由来の解明を試みたのが本書である。著者は、膨大な資料の中から、特に英国のレターマニュアルにその拠り所を求め、各時代の特徴を示し、その変化の過程を明らかにしている。

本書の構成は以下の通りである。

- 第Ⅰ部 序論—英語通信文発達のための歴史的背景
 - 第1章 レターのはじまり
 - 第2章 英語の発達
 - 第3章 15世紀の英文レターの特徴
- 第Ⅱ部 英文レターマニュアルの変遷

Ⅱ-1) 初期—黎明期—

第4章 16世紀の英文レターマニュアルの特徴

Ⅱ-2) 中期—成長期—

第5章 17世紀前期の英文レターマニュアルの特徴

第6章 17世紀中期の英文レターマニュアルの特徴

第7章 17世紀後期の英文レターマニュアルの特徴

Ⅱ-3) 後期—確立期—

第8章 18世紀の英文レターマニュアルの特徴

第9章 19世紀の英文レターマニュアルの特徴

Ⅱ-4) 現代—完成期—

第10章 20世紀の英文レターマニュアルの特徴

終章 英文ビジネスレターの生成と英文レターマニュアルの役割

2. 各章の概要

(1) 第1章 レターのはじまり

本章では、通信文の起源を探るために、紀元前のメソポタミア、ギリシャ・ローマ時代まで遡り、世界最古のハンムラビ王の書簡(レター)やアマルナ文書などから、初期の通信文の特徴を明らかにしている。

当時の通信は、発信者の口述メッセージを専門家の書記・写字生が書き写し、それをメッセンジャーが名宛人まで届けるという方法が取られていた。書信(レター)の形式は既に、書き出しの

“To A say : Thus saith B” “To A thus B” “A to B, greeting”, 結びの“Vale” “Farewell”などの定型表現, レターの構成 (①宛先と挨拶, ②本文, ③結び, ④日付) など, 特定の様式に則っていた。

このようなレターの構造, 形式の理論的解明を試みたのがアルベリクス (1080年頃) で, レターは5つの構成要素【① *Salutatio* (=greeting), ② *benevolentiae captatio* (=persuasive introduction), ③ *narratio* (=background), ④ *petitio* (=request), ⑤ *conclusio* (=conclusion)】から成るという彼の説は, やがて新しい学問“dictamen”へと発展した。12世紀初めには, 中世最大の法律学校ボローニャで独立した専門科目として確立し, 12世紀末までには, イタリアから西ヨーロッパ諸国にも広まっていった。

イタリアから dictamen を導入した英国では, 13世紀には関連の教本が出版され, 14世紀になると, 大学やグラマースクールなどで教えられるようになった。実務ですぐに使えるという学科の性格上, dictamen に対する人気は高く, 例えば, オックスフォード大学の Thomas Sampson 教授の講座は, 正規の科目として認められなかった (卒業単位に算入されない) にもかかわらず評判が良く, 多くの若い受講者 (学生, 研修生, 執事など) でいっぱいであった。

(2) 第2章 英語の発達

本章では, 英語通信文の誕生に最も関係の深い中世英語時代 (1150—1500年) を検討し, 英語が被支配者階級の言語, あるいは農奴の言語と蔑まれていた時から, どのようにして洗練された書き言葉へと変身し, あらゆる階層の人々に通信用の言葉として採用されるようになったのかを明らかにしている。

今から約900年前の英国では, 英語の国語としての地位が脅かされており, ノルマン征服 (1066年) 後約200年間は, フランス語が国を代表する言語として君臨し, 英語は単なる下層階級の言語に留まっていた。しかし, 14世紀になると, 英・仏の対立から, 英国国民のフランスに対する激しい敵対意識が芽生え, ナショナリズムの醸成

と共に, 英国国民は, 自分たちの国語への誇りと尊敬の念を持つようになった。そのような機運に呼応するかのようになり, ヘンリー5世は, 多くの公私の文書 (レター) を英語で記した。「王様御自ら母国語でお書きになる」ことを知った国民は, 意を強くして, 書き言葉としての英語の使用に励むようになった。その結果, 英国では, 1425年を境に英語の文書が急増した。英語は, 文字通り母国語としての地位を確立したのである。

(3) 第3章 15世紀の英文レターの特徴

本章では, 15世紀の代表的な書簡集であるパストン・レター (*The Paston Letters*) から163通, セリー・レター (*The Cely Letters*) から197通を取り上げ, その特徴を明らかにしている。

当時のレターの基本スタイル (形式) を探るために, 用件に至るレターの最初の部分 (Beginning) と, 用件を述べた後の終わりの部分 (Ending) に分けて検討し, 共通の表現パターンとその傾向ならびに一般的特徴を示している。

次に, 本文での言及項目に関し, 健康についての心配, レターの着信についての関心, 秘密保持の重要性, 忠誠の誓いを強調したもの, 天候・自然への言及が少ないなど, 当時の社会状況が反映されていることを明らかにしている。

最後に, 本章の検討結果に基づき, 当時の典型的なビジネスレター・モデルの提示を著者は試みている。

(4) 第4章 16世紀の英文レターマニュアルの特徴

本章では, 16世紀半ばに発行された初期の英文レターマニュアルの特徴を明らかにしている。「英語で書かれた最初のレターマニュアル」である *The Enimie of Idleness*, 「ラテン語から英語へと進む過渡的な時代における一種の橋渡しの役割を果たした」*A Panoplie of Epistles*, 「古いコミュニケーション理論の実行を容易にした」と評価された *The English Secretary*, 「異文化環境におけるビジネス活動の基本を指摘した, 画期的かつ最高のマニュアル」と絶賛された *The Marchants*

Avizo, 「専門書 (学術書) として貴重な」 *Directions for Speech and Style* など, 黎明期に相応しい, 特色あるレターマニュアルが続出した。当時の読者は, 上記のマニュアルからレターの構成要素 (宛名, 挨拶, 署名) とその表現 (受信者の地位に応じた適切な修飾語), レター本文の書き方 (受信者への配慮, 書くための基本・スタイル, 論理的な構成) と具体的な例 (モデルレター) など, レターの基本 (書き方・仕組み) を学ぶことができた, と著者は指摘している。

(5) 第5章 17世紀前期の英文レターマニュアルの特徴

17世紀初期のマニュアルでは, レターの書き方について特に詳しい記述はなく, 読み物としての「レター例文集」を意図して作られている。つまり, 当時のレターマニュアルは, 16世紀のマニュアルと同じような内容の教本として対抗するのではなく, 遊び, 楽しみの要素を加味した読み物を強調し, 英文レターの大衆化の促進に貢献したのである。

(6) 第6章 17世紀中期の英文レターマニュアルの特徴

17世紀中期に発行されたマニュアルの作者は, 序文で, 他のマニュアルを激しく非難, 攻撃して, 自著の内容の独創性を強調している。すなわち, ①レターの二大分類 (“Letters of Business”, “Letters of Compliment”), ②行間 (スペース) による尊敬の度合いの示し方, ③レター本文の三部構成 (「序論」「論述」「結論」) などの独創的な教え, また, レターの書き出し, 結びの定型表現, 宛名と末尾の組み合わせ例文の提示など, これまでのマニュアルに見られない読者への工夫・配慮が見られる。

このように, 独創的な内容や使いやすさを備えた17世紀中期のマニュアルは, 著者によれば, 社会生活上必要な「実用書」としてその地位を確立したのである。

(7) 第7章 17世紀後期の英文レターマニ

アルの特徴

17世紀後半のマニュアルは, これまでのマニュアルに比べ, 内容的には特に見るべきものではなく, レターの書き方の指示やレターの定型表現などは, 従来のマニュアルからの流用 (借用), 要約であった。ただ, 当時の著者は, 読者の興味を引くために, 従来のマニュアルとはやや異なる, 内容の拡大を試みている。ひとつは, 法律文書に関する解説を加えたものであり, もうひとつは, ビジネス (商取引) に焦点を当て, ビジネスの入門書として作成されたものである。レター例文に関しては, 従来のものよりも簡潔で読みやすい。例えば, 呼びかけ (“Sir”) から始まり, 冒頭の挨拶はなく, いきなり用件に入り, 最後も仰々しい挨拶はなく, 簡潔な結び, 結尾語, 署名で終える。現代のビジネスレターに近いものが既に見受けられたのである。

(8) 第8章 18世紀の英文レターマニュアルの特徴

当時 (18世紀) の作者は, 17世紀後期のマニュアルと同様に読者のニーズに合わせて, マニュアルの対象を商人に限定したもので, 一般大衆を対象としたものと二種類のマニュアルを出版している。前者はやや専門的で, 実用性を重視したもので, 後者はやや教養書的色彩の強いものである。しかし, レターに関する内容には特に目新しい記述は見当たらない。ただ, レター表現に関しては, 全般的に仰々しい表現を抑えた, わかりやすい, やさしい単語が使用され, 相手本位の書き方を指向しているが, ビジネス特有の言い回し, いわゆるビジネスジャーゴン (business jargon) も頻繁に使用されている。

従って, 18世紀の英文レターマニュアルは, 読者が基本から学ぶ教本というよりは商取引の実務の理解を助ける副読本として, あるいは特定状況に相応しい表現を即座に, 参考・模倣するための虎の巻 (参考書) としての役割を果たした, と著者は指摘している。

(9) 第9章 19世紀の英文レターマニュアルの特徴

19世紀に発行されたマニュアルの内容は現行のマニュアルとほぼ同じで、レターの書き方、形式など理論的な説明は既に確立していたようである。ただ、現在の我々の書き方と著しく異なる点は、ビジネスジャーゴンと言われる定型表現の使用に関する取り扱いで、例えば、実際のレター例文では、“Your favour of the 2nd inst. is just to hand.” “Thanking you in anticipation, …”など、現代では陳腐な決まり文句として否定される、旧式の定型表現が依然多用され、紹介されていることを著者は明らかにしている。

(10) 第10章 20世紀の英文レターマニュアルの特徴

20世紀は、従来の旧式レターの書き方から新しい現代の書き方へと移行する時期であり、本章では、それがいつ頃始まったのかを明らかにしている。

その移行時期を特定するために、マニュアルの主にレター特有の専門表現についての説明箇所を中心に検討している。その結果、英国では、20世紀初期はまだ19世紀的な書き方が尊重され、旧式の定型表現がそのまま活用されている。1920年代も、公的機関の提言、実業界の声などから、従来の定型表現を使うべきではないと強く意識するようになったが、実際のレター文には、まだ旧式の定型表現が見受けられる。30年代半ば過ぎにやっと、“new wine”を入れる“new bottle”が必要なが認識され、旧式の定型表現が姿を消し、新しい書き方が取り入れられるようになり、以後40年代、50年代と同じような傾向が続いた。

このことから、いわゆる現代の標準となるレター書式が出現したのは、英国では、米国に遅れること約50年、1930年代半ば頃である、と著者は推定している。

(11) 終章 英文ビジネスレターの生成と英文レターマニュアルの役割

本章では、これまでのマニュアルの変化の歴史を俯瞰し、「なぜ多くのレターマニュアルが大衆に受け入れられ、人気を博したのか」その原因を探り、また、マニュアルの対象であった中流階級、とりわけ商人はどのようにして技術を習得したのか、その研修の実態と、その際のマニュアルの役割を明らかにしている。

英文レターマニュアルが存在していない初期(15世紀)の頃の公的、私的通信文(レター)は、dictamenの基本形式を踏襲しており、現行の英文ビジネスレターの原形は、dictamenに基づく。そして、16世紀のレターマニュアルの出現以降、ビジネス特有の堅苦しい、重厚かつ冗長な表現が多用されていた英文ビジネスレターは、その後、徐々に変化し、20世紀には、普通の、やさしい表現で書かれるようになった。この現象を紀元前の、レターのはじまりの頃から見ると、「話し言葉」から「書き言葉」、再度「書き言葉」から「話し言葉」へと、約3500年の年月を経て、「原点」に復帰したことになる。

次に、英文レターマニュアルがなぜ人気を博したのかについては、マニュアルがルネッサンス期特有の知的欲求の充足という風潮にも助けられて、中流階級、特に商人の学ぶことへの飽くなき追求に適合したからであると著者は指摘している。当時の商人は、徒弟制度のもと、約7年間の研修を経て一人前となった。その間彼らは、読み書き、計算などの基本的な学科ならびに教養・躰などは初等教育の学校で学び、業務遂行に必要な技能・技術は現場で習得することになっていた。しかし、研修期間中にすべての事柄を完全に習得することは容易ではなく、例えば、若い商人は、自分の置かれた状況に相応しいレターを正確かつ迅速に書くために、レターマニュアルの助けを求めた。ここにマニュアルの存在意義があり、商人たちは、マニュアルを自己啓発、独学、家庭学習用として活用、ある時にはレター例文集として、時にはビジネス入門のための基礎知識として、あるいは礼儀作法・教養のひとつとして学び、レターの書き方を習得していった、と著者は指摘している。

3. 本書の特長と問題点

以上に要約したように、本書は、膨大な資料を駆使した著者の長年の緻密な研究の成果であり、少なくとも「著者流に通史をまとめたところに意義がある」ことは間違いない。さらに本書の特長を要約すれば、以下の通りである。

- ① 参考書（マニュアル）が存在していない初期段階において、15世紀の商人の交信レター（パストン、セリーレター）の特徴から、すでにレターとしての一定の書式が存在していることを指摘し、今日のビジネスレターの原形とも言えるモデルレターを提示した。
- ② レターの書き方に関して、紀元前の「話し言葉」の使用から16、17世紀のやや仰々しい「書き言葉」への変化、そして最終的には現代の「話し言葉」の活用への移り変わりを指摘し、さらに英国での変化が米国に比べて約50年遅れたことも明らかにした。
- ③ 約500年にわたるレター書式・スタイルの非常に緩やかな変化が、商人の「伝統的なものを変えることへの恐れ」、つまり伝統を重視する保守性にあることを指摘している。

しかし、若干の不明な点または不足に思われる

点も見受けられる。評者が気付いた問題点は、以下の通りである。

- ① 外国にどのような先行研究があるのか、日本には戦前・戦後どのような研究があるのかという紹介があれば、本書の位置付けと本書の学術的意義が一層明確になることと思う。
- ② 本書の様々な指摘の中には、新発見なのか先行研究の中にも含まれているのか、評者の知識不足の故に明確でなかった箇所があった。①と重複するが、先行研究との関係を明示してくれれば、読者に親切である。あるいは本研究で対象とした資料が膨大で、そこまでの仕事が不可能であった、ということであろうか。
- ③ 結論ともなる終章で述べられた、商人の教育とマニュアルの役割の関係をもう少し具体的に紹介して欲しかったが、それは不可能なのであろうか。

上記のような不足と思われる点はあるが、本書は著者の長年の精進が生んだ労作である。学術的にも極めて貴重で希少な研究書であり、本書のような歴史的研究は関係学会で長く待望されていたものである。学界の貴重な財産として、後世に永く引き継がれるものと確信する。